

ラテンアメリカ都市物語

＝ 第3回 ＝

リマ（ペルー） － 変化し続ける諸王の都 －

原田 慶子

ペルーの首都リマ

ペルー共和国リマ州リマ市。ペルーの政治、経済、文化の中心地であり、隣接するカリャオ憲法特別州と合わせ、国民の3割に相当するおよそ1,000万人が暮らすリマ・メトロポリターナ（リマ首都圏）を形成する。かつてはスペインによる南米支配の拠点として栄華を極め、カトリック布教の前線として機能した。そのため今もカトリック信者が多く、リマの守護聖女にして、アメリカ大陸初の聖人「サンタ・ロサ・デ・リマ」の日（8月30日）や、奇跡の主として崇められる「エル・セニョール・デ・ロス・ミラグロス」の月（10～11月）のプロセシオン（聖行列）など、一年を通じてさまざまな宗教行事が行われる。

南緯約12度と比較的赤道に近く、海岸砂漠性気候に属するリマは、太平洋沖を流れる冷たいペルー海流のおかげで、夏の最高気温は30度前後と過ごしやすいう上に、冬の最低気温が15度を下回ることも滅多にない。しかし最近では冬に小雨が降るなど、気候変動の影響が生じつつある。リマの古い建物は降雨を想定した造りになっていないため、雨漏りや漏電といった被害が出やすい。築15年の我がアパートも、ここ数年雨樋を設置するなどの対策に追われた。それでも傘を持つという習慣は未だ定着しておらず、濡れたまま散歩する人を見かけるたびに、私の頭は疑問符でいっぱいになる。

リマ建都と植民地時代

インカの地方領主タウリチュスコが治めていたリマック川の河口付近に、インカを滅ぼしたスペイン人侵略者フランシスコ・ピサロが“La Ciudad de Los

Reyes”（諸王の都）を建都したのは、1535年1月18日。のちに「リマ」と呼ばれるようになったこの街は、スペイン式の方格設計に基づいて建造された。タウリチュスコの屋敷はペルー総督府兼ピサロの住居（現大統領官邸）に、その東側にあった司祭場プマ・インティはカテドラル（大聖堂）に、正面の広場はマヨール広場（現アルマス広場）にそれぞれ置き換えられた。各宗派の教会や修道院が次々と建てられ、その中の1つであるサント・ドミンゴ教会・修道院内には、南米最古となるサン・マルコス大学も創立された。

1570年には異端審問所が設けられ、先祖伝来の偶像崇拜を細々と続けていた先住民インディオだけでなく、当時勢力を伸ばしつつあったルター派や、商人として新大陸に渡ってきたユダヤ系ポルトガル人も多く摘発された。1820年の閉鎖までに起訴された者は1,474人、死刑判決が下されたのは32人と記録されているが、拷問中の死亡者数については明らかになっていない。現在この異端審問所は「宗教裁判所博物館」として一般公開されており、英語とスペイン語のガイドツアーに参加できる。拷問にあえぐ蠟人形の表情に、眉をひそめる観光客は少なくない。

17世紀初頭になると、リマに集まる巨万の富を狙う海賊や私掠船が街を襲い始めた。太平洋から、今よりずっと川幅の広かったリマック川を遡ってやってきたのだ。その対抗策として、リマを囲む巨大な城壁が建造された。1684年から3年を費やし造られたその壁は、街の北側を流れるリマック川を底辺に、サン・ファン・デ・ディオス病院（現サン・マルティン広場）を頂点としたいびつな逆三角形をしており、東はグラウ通り、西はアルフォンソ・ウガルテ通りに囲まれている。こ

のエリアがほぼ現在のリマ旧市街・セントロ地区に該当、アルマス広場を中心とするリマ歴史地区は、1991年にユネスコの世界文化遺産に登録された。



図1：リマの地図（南北が反転）。城壁に囲まれたこんな小さな町が現在の姿に発展すると、誰が想像しえただろうか

(Wikipedia, Lima から引用)

1746年10月28日、リマと隣接する港町カリャオをマグニチュード9クラスの大地震が襲った。当時3,000ほどあったリマの建物はわずか25戸に激減、村全体が大津波に飲み込まれたカリャオに至っては、人口4,000人のうち生き残ったのはたった200人と記されている。そのリマを復興させたのが、1759年に着任した副王マヌエル・デ・アマットだ。アマットといえば46歳年下の歌姫ラ・ペリチョリとの浮名が有名だが、彼は統治者としても優秀で、地震の傷跡が残る街を再整備し、教会の再建にあたっては後期バロック建築やロココといった当時の最新建築を取り入れていった。近年、この大地震以前の地下遺構が発見・修復され、「ボデガ・イクアドラ博物館」として一般公開されている。現大統領府とサン・フランシスコ教会・修道院の間に位置するこの博物館には、市民が集う井戸のみならず屠殺場や肉の解体場跡まであり、都市中心部にこのような場所が存在したという事実は興味深い。

アマットは南米初となる「アチョ闘牛場」の建造に



専用レーンを走るメトロポリターノ・バス（写真はいずれも筆者撮影）

加え、「デスカルススの並木道」や「水の散歩道」を配し、リマック川北岸を整備した。一方、公園やカフェなど市民の憩いの場の誕生など、非支配層のための庶民文化が急速に育っていったのもこの時代である。新聞や雑誌が創刊され、雄鶏と雌鶏の求愛の様子を表した「サマクエカ」という踊りが生まれた（のちにペルーの国民舞踏「マリネラ」に発展）。リマがその歴史上、突如として生彩を帯びてくる18世紀後半。すでに本国スペインはラテンアメリカの独占貿易権を失い、国内ではトゥパック・アマル2世の反乱（1780年）など植民地支配に対する抵抗が各地で発生。諸王の都が南米の“すべて”だった時代は着実に終焉を迎えつつあったが、壁の内側の人々は知る由もなかった。

ペルーの独立と共和国時代

ペルーの独立史（ペルー共和国の誕生は1821年7月28日）や、太平洋戦争（ペルー・ボリビア対チリの戦争1879～84年）については多く語られているのでここでは割愛し、リマの街に焦点を当てていく。

ペルー共和国の首都となったリマが近代都市としての一步を踏み出したのは、19世紀中頃だ。このころに興ったグアノ・ブーム（海鳥の糞が化石化した鉱石）は国家財政を安定させ、リマの公共事業は活発になった。また外国企業との間で国内鉄道建設事業が次々に締結され、1851年にはリマ～カリャオ間を走るペルー初の鉄道が完成した。小さな漁村に過ぎなかったミラフローレスやチョリジョスが次々と行政区に昇格。新市街と呼ばれるエリアが広がっていった。

1855年には初めてのガス灯がリマのセントロを煌々と照らし、当初は馬が曳いていたトラム（路面電車）も、20世紀初頭には電力に置換されていった。リマ市バランコ区の区立公園そばにある「電気博物館」には、ペルー



メトロポリターノ・バスと停留所。安全のためバスが停車してから停留所のドアが開く

の電力史とともに、トラムが走るリマの穏やかな風景が紹介されている。当時を知る日系ペルー人によると、「トラムは子供たちが全速力で走るよりのんびりとしていた」そうだ。彼はよく発車直後のトラムに飛び乗り、悪友と海岸まで遊びに行ったという。「当時のリマは本当に美しく、まさに“太平洋の真珠”そのものでした」という彼の言葉が印象に残っている。

ここで日系移民について簡単に触れておこう。1899年に始まった日本人のペルー移住では、劣悪な労働環境の中で多くの命が失われた。年季終了、もしくは逃亡という形で首都に移り住んだ日本人は、床屋や雑貨店などの商いを始める。しかし、彼らの経済的成功はペルー人の恨みを買い、1940年5月にはリマ排日暴動が勃発。第二次世界大戦の最中には日本人の集会、日本語教育、日本語新聞の発行が禁止され、日系人資産の凍結や北米への強制収容が行われた。戦後日系人がその名誉を回復し、初のペルー大統領輩出に至るまでには、約半世紀を要した。

膨張し続ける現代のリマ

戦後、リマ新市街はさらなる近代化を遂げた。1966年にはペルー初の高速道「パセオ・デ・ラ・レプブリカ」の建設が開始。地面を大きく掘り下げて造られたこの道路は、リマ旧市街とバランコ区を結ぶ首都の大動脈になっている。この工事による大量の排土を利用して整備されたのが、カリヤオのラ・プンタとチョリージョス区を繋ぐ海岸道「コスタ・ベルデ」だ。それまでリマの海岸はチョリージョスなど一部を除いてほとんど浜辺がなく、海に面した崖下は人が並んで歩ける程度の幅しかなかったという。そこに先の土砂で人口浜を造ったのだから、なんとも大胆ではないか。コスタ・ベルデは2007年のイカ地震をきっかけに再開発と拡張が進み、今ではラテンアメリカ最大の食のイベント「ミストゥーラ」や「ダカール・ラリー」等の国際イベントが開かれるようになった。しかし地震多発国にも関わらず、津波対策はほとんど取られていない。かつてのリマを崩壊させたあの大地震がもう一度起きれば、長さ20kmを超すこの海岸線はひとたまりもないだろう。

1980年のテロリズムの台頭や90年代のハイパーインフレに翻弄されながらも、首都として拡大し続けてきたリマ。都市開発にともなって不動産価格も高騰し、リマ・トップと呼ばれる新市街5区に至っては、2007～15年で住宅価格が233.8%も値上がりした。ここ1

年は販売戸数に頭打ち感があるものの、値崩れの様子はなく新規物件の建設が続いている。ショッピング・センターも次々に誕生し、新市街ではすでに飽和状態となっている。

10年には前述のパセオ・デ・ラ・レプブリカに敷設された専用レーンを走る「メトロポリターノ・バス」が、翌年にはリマ初の高架式鉄道「メトロ」1号線が開業した。14年には1号線延伸部分となる第2区間の運行も開始、現在は2号線の建設が進む。メトロは6号線まで予定されているが、建設費用や用地買収等多くの問題を抱え計画は遅々として進まない。いつ完成するかは神のみぞ知る、といった状況だ。



図2:「メトロ」の建設予定図。現在完成しているのはLine 1の1路線だけ。(peru21.pe から引用)



リマを南北に横断する鉄道・メトロ1号線のホームにて一車体はフランスのアルストム社のもの

ところで、この図2を見て「この図の一体どこまでがリマ市なのか？」と、ふと疑問を抱いた方もおられるだろう。

人口の増加や、度重なる地震により本来の形を失いつつあった城壁は、1868年に完全撤去された。太平洋戦争で傷ついたリマの復興と並行して鉄道や道路網が

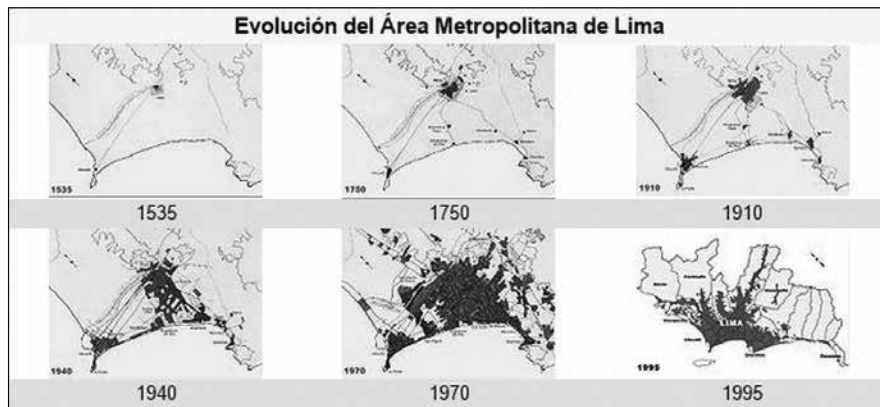


図3：膨張するリマ首都圏。「リマ中央」と「北部」「東部」「南部」「カリャオ」ゾーンに大別される（Wikipedia, Lima から引用）

急速に拡大、地方から都会への移動が容易になっていく。その陰で、リマ郊外にも建都以来最大の変化が起こっていた。それが、巨大スラム「プエブロ・ホーベン（若い町）」の誕生だ。

農民の都市移住に拍車をかけたのは、1969年に施行された農地改革だ。改革の恩恵は一部に留まり、農地を持てなかったアンデスの貧農たちは、リマ郊外の砂漠地帯を始めとする海岸部の荒涼とした場所に住み着いたのである。水も電気もない茫洋とした砂漠が町へと成長するのに、たいした時間はかからなかった。それほど多くのインディヘナが一気にリマを目指したのだ。彼らは自治組織を作り、政府当局や自治体と交渉して生活インフラを整えていった。1960年に人口160万だったリマは、わずか半世紀のうちに巨大メガロポリスへと変貌したのである。

1989年に誕生したサンタ・アナ区を含め、現在43の区を抱えるリマ市。かつてスラムと呼ばれた郊外エリアではすでに世代交代が始まり、新中間層と呼ばれる新しい社会経済階層が急増している。ガイドブック等で「リマ」と紹介される中央エリア（旧市街・新市街を合わせた15区）の人口は、冒頭にお伝えしたリマ首都圏人口の約18%、わずか180万人に過ぎない。視点をもう少し郊外に移せば、今回の都市物語もまったく別物になるだろう。新市街に暮らす自分の体験を、“リマ”の日常として語るのが憚られることもある。膨張し続けるリマ。変貌し続けるリマ。そのパワーと魅力を余すところなく伝えられるよう、これからもこの街を愛し続けたい。

（はらだ けいこ リマ在住フリーランスライター）





『キューバ現代史 ー革命から対米関係改善まで』

後藤 政子 明石書店

2016 年 12 月 318 頁 2,800 円+税 ISBN978-4-7503-4457-7

1953 年のフィデル・カストロが率いたモンカダ兵営襲撃に始まり、後に 7 月 26 日運動と呼ばれるキューバ革命運動は、その後シエラ・マエストラ山中からのゲリラ戦を経て 59 年 1 月 8 日の革命軍のハバナ入城で勝利を得た。59 年 5 月に制定された農業改革法は穏健なものであったが、外国人の土地所有を禁じたこともあり米国は強く反発し、60 年の経済封じ込め政策の開始、61 年のブラヤ・ヒロン（ピッグス湾）侵攻で対決が決定的になり、ソヴィエト連邦のキューバ支援、62 年 10 月のミサイル危機へと突き進み、カストロのキューバ政府が共産主義を標榜するに至った。この間の革命の“変質”、ゲバラが世界革命思想ゆえにボリビアでのゲリラ活動での「予告された死」、東西冷戦の激化で翻弄され、ソ連の経済圏に組み込まれたキューバだが、米国の苛酷な経済制裁と 91 年 12 月のソ連の解体とによって経済・国民生活は壊滅的な打撃を受け、海外脱出者が激増した。

その後 92 年から今日に至るまで、政府は国民をいかに食べさせるかに腐心し、生産性の低かった国営農場の解体、経済自由化の前進、外資の積極誘致を試みてきたが、それは平等主義社会の解体、所得格差増大、不正の横行、さらにより良い生活を求める頭脳流失等の問題と裏腹になるものである。2010 年代に入り、キューバ型社会主義の改革が種々試行されているが、他方政治改革は一党独裁体制の堅持から脱することは出来ていない。しかし、高齢のフィデルの第一線からの引退、ラウル・カストロ、ディアス・カネル第一副議長を中心とする後継体制の確立、14 年の米国のオバマ政権による関係改善、そして 16 年 11 月のフィデルの死によって、なお多くの問題を抱えながらもキューバは国内・対外関係で大きく変容しようとしている。半世紀のキューバ現代史をたどり、今日のキューバを理解するために、問題・課題も率直に挙げている。キューバ関係の著訳書も多いラテンアメリカ現代史研究者（神奈川大学名誉教授）による最新の総括的な解説書。

〔桜井 敏浩〕



『パナマ ー歴史と地図で旅が 10 倍おもしろくなる』

松井 恵子 三冬社

2016 年 7 月 214 頁 1,500 円+税 ISBN-978-4-86563-017-6

コロンブスの西インド諸島“発見”からバルボアによる地峡を越えての太平洋への到達、イングランドのフランシス・ドレイク、ヘンリー・モーガンはじめ金銀を運ぶスペイン船を襲いパナマの町を略奪した海賊たちの物語に加え、マゼランの世界一周、北米大陸北西部海岸をめぐるスペイン、ロシア、英国の争奪戦まで、広範に大航海時代からの新大陸をめぐる歴史を紹介し、カリフォルニアでのゴールドラッシュを契機にしたパナマ地峡横断鉄道建設と運河建設をめぐるレセップスの挫折、米西戦争後の米国によるパナマの宗主国コロンビアからの分離運動の煽動、パナマの“独立”による米国・パナマ間の条約締結後再開された運河建設の経緯を詳細に辿っている。そして、第二次世界大戦、1999 年の運河のパナマへの返還後、新パナマ運河（拡張計画）工事現場への著者の往訪記、ニカラグア運河計画や北極海航路開発等の新しい航路開発競争にも言及している。

著者はブエノスアイレスとロサンゼルスに駐在した経験をもつ商社員の妻。世界史の面白さを知って欲しいと、多くの参考文献を駆使して纏めている。〔桜井 敏浩〕



『ソブリン危機の連鎖 —ブラジルの財政金融政策』

水上 啓吾 ナカニシヤ出版

2016年3月 222頁 3,800円+税 ISBN978-4-7795-1030-4

いまやグローバル化の流れは世界各国において不可避である。本書は新興国の一つブラジルにおけるグローバル化の受容過程を、財政での現象と債務累積問題以降の国際金融への対応を解明することで説明を試みることで、ブラジルの政府信用危機と資本移動の考察が、日本における政府債務管理の位相の明確化につながることを期待したものである。

まず1990年代の自由化と緊縮財政路線、IMFのコンディショナリティと後に財政責任法になる財政規律確立の導入から入り、政府債務管理の一環でもある公営企業の民営化が進められ、カルドゾ政権期の憲法修正、海外からの資金調達の拡大、問題を抱えた売上税改革が連邦・地方政府と経済アクターの利害によって失敗し租税負担率が上昇したことを指摘、社会保障制度の整備と国際収支危機との関係をブラジル国内外の文脈から正当化されうるとみている。これら連邦政府の政策の下での地方政府のグローバル化への対抗軸としての対応を、財政責任法と地方自治体の財政運営の関連で自治体の参加型予算制度への取り組みの効果を分析し、住民参加型の制度形成効果が限定的であることを明らかにしている。これらを振り返り、カルドゾ政権期において、大規模な国際資本移動等による政府債務危機や通貨危機に翻弄され、国内外の信用回復のために財政運営の持続可能性と通貨価値の安定をめざす財政金融政策が同時に行われたことの意義を検討している。

本書は、ブラジルの政府部門がその経済のグローバル化に対応するために何が必要であったかを、カルドゾ政権期における財政金融政策に関する制度形成過程を丁寧に考察することによって解明しようとしたものである。著者は財政学を研究する大阪市立大学大学院准教授。

〔桜井 敏浩〕



『ブラジル日系移民の教育史』

根川 幸男 みすず書房

2016年10月 632頁 13,000円+税 ISBN978-4-622-07981-1

ブラジルでは日本人移民は教育熱心と言われていたが、ドイツ・ユダヤ系の人々もそう言われてきた。日本人移民がブラジルにおいて変容・融和していく中で、集団、それを構成する個人が子弟教育によってどのような人間、文化を作ろうとしてきたか？それが教育される側の子供たちはどう受け止めてきたかを、100年の史実に即して戦前期の日系教育機関（学校）での日系教師と移民子弟の実態、教育内容とその成果を具体的に検証している。

19～20世紀のブラジルの日本人をも含む移民導入、その子弟教育から始まり、ブラジルにおける日系移民子弟教育史の概要、日系教育機関の分類とその性格、これまでの日本人移民史では等閑視されてきた都市サンパウロの日系小学校を内陸農村部のそれと比較し、具体的に3人のキリスト教日系子弟教育者を取り上げて彼らの人間像とネットワークの形成を考察、戦前期の子どもの生活世界を紹介し、最後に日系移民子弟教育の成果としての二世の理念、戦後の日系人のプレゼンスの拡大、政治参加、日系政治家・議員の誕生とその境界人的パーソナリティまでを論じている。

ブラジルの日系子弟教育を生徒たちからの視点も交えて考察し、二世が母国の敗戦後の価値観の変化の中から政治家・軍人としてブラジル社会で活躍の場を拡げていった経緯なども興味深い。大阪出身だがサンパウロ大学大学院で学びブラジリア大学や日本の大学で教鞭を取ってきた移民史・教育史の研究者による貴重な学術研究書。〔桜井 敏浩〕